

近代文学論集第二十九号
二〇〇三年十一月発行 抜刷

日本近代文学会・九州支部
『近代文学論集』第29号から
(85～90ページのみ)
論文全体を閲覧するために第29号の購入を、お願いいたします。

三島の「橋づくし」

——反近代の近代的表現として

ダニエル・ストラック

三島の「橋づくし」

—— 反近代の近代的表現として

一 「橋づくし」のあらすじ

三島由紀夫の短編小説「橋づくし」においては、四人の女性全員が七つの橋を渡ることを目標とする。有名な料亭の箱入り娘の満佐子、花柳界の小弓とかな子、そして満佐子の付添人である女中のみなは折橋をしながら、月に対して願をかける。小弓は金銭、かな子は旦那、満佐子は映画俳優の恋人といった、それぞれの夢を持ち、出発する。しかし、みな願が何であるのかは誰にも分からない。折橋の内容が実現するためには、三つの条件が満たされなければならない。それは、同じ道を二度と後戻りしないこと、人と言葉を交わさないこと、七つの橋全ての両袂で折橋をすることである。

それらの願いを抱いた人々は、先の条件を満たすことができず、願望を実現できない。最初にかな子は腹痛が原因で帰らざるを得なくなる。次に小弓は昔の知人と偶然、出会い、つい会話をしてしまつたために脱落する。終盤において、満佐子とみなが最後の橋を渡ろうとする際に、満佐子は橋の上で自殺を図っていると誤解した警官

に腕をつかまれ、つい叫んでしまう。結局、みなが七つの橋すべてを渡ることに成功する。

二 「橋づくし」の背景と先行研究

「橋づくし」は比較的読後の印象が希薄な作品といえる。批評家の平野氏は「花柳界などでいまも信じられている願かけを描いただけの作品にすぎない」と分析した。しかし、花柳界において通常信じられている迷信を、ありのままに描写したという平野氏の説明は一般に疑問視されてきた。花柳界に、「橋づくし」の願かけと類似した風習が常時あったという証拠は特にないため、行の謎を説明しようとする仮説は多数あるが、それらの概要だけに議論を限定したい。

昭和三四年に、「橋づくし」が西川会によって上演された際のプログラムにおいて、三島は「この台本は数学的特色を持つてゐる」と指摘している。加えて、前田氏は「橋づくし」の着想が「有名な

数学パズルを下敷きにしている可能性が高い」と論じている。「ケーニヒスベルクの七つの橋」は、北ヨーロッパにあるケーニヒスベルク市（現在はロシアのカリニングラド市）のプregel川に架かった橋をモデルにした数学のパズルである。その町の住民は、散歩の際、同じ橋を二度渡らない限り、周辺にある七つの橋すべてを渡って元の場所に戻る事ができないことに気づいた。その後、スイスの著名な数学者のオイラー氏は、この数学のパズルの条件に従って同じ橋を一度のみ渡って、七つの橋すべてを渡することは数学的に不可能であることを証明した。前田氏の仮説は三島自身の解説に基づいているため、興味深いものであると考えられる。

「橋づくし」の着想に関する他の主な仮説には、竹田氏の七つの大罪説と生老病死説と、中野氏のイザイホウ説がある。七つの大罪説はカトリックの教義を基盤としている。それは、「橋づくし」の登場人物は七つの大罪を無意識のうちに犯しながら、「海へ流れる川としての人生を生き、海（死）へと確実に流れ出る」という発想である。作品全体を眺めれば、七つの大罪の予兆がみられるが、作品の具体的な詳細とは合致していない。例えば、七つの大罪の一つに当る小弓の飽食は、作中において明確に問題視されているが、腹痛で帰るのは小弓ではなく、かな子である。「橋づくし」における罪は、それと各人物の脱落との直接的な因果関係がないため、七つの大罪説は作品の着想とは考えにくい。

竹田氏は登場人物が歩いた道程を実際にたどり、そこに登場する築地の病院、保険会社、寺などに注目して、生老病死説を提案した。その説によると、人生の象徴である川に臨接する形で、出生届を提出する場所である役場や、死に関連性をもつ寺が描写されている。

その上、三島氏自身の葬儀が築地本願寺の本堂で行われたことは興味深い事実である。しかし、死のニュアンスが作品に取り入れられているにしても、他の生や、老いと病のニュアンスはプロットにほとんど関連していない。三島がその道程を歩いた際、様々な建物に注目し、作品に取り入れたのは明白であるが、生老病死説を下敷きにすることを前提として、道程を決めたという指摘に筆者は同意できない。

中野氏は、三島の着想が折口信夫氏の研究に紹介されている沖繩の久高島のイザイホウの祭に根ざしていると考えている。しかし、日本各地において、橋に関連した多数の行事が確認されている。数多くある行事の中から、作品との類似性が少ないイザイホウの祭に注目することは望ましくないと考えられる。橋は象徴性に富んだイメージを伴っているため、多数の文学作品において、重要な意義を担う形で登場している。沖繩の伝統的儀式においても、「橋づくし」においても、同類の神秘性が橋に託されていることは確かだが、それらが関連性を示すことはない。

作品の着想に関しては、様々な仮説が提出されてきたが、複数の説が同時に正しいことは有り得る。とはいえ、今までに「橋づくし」の詳細と完全に一致した仮説はなかった。北陸地方の「橋めぐり」は作品内容と完全に合致しているため、本論において紹介したい。「北陸の河川」において、「橋めぐり」は以下の通り定義されている。

橋めぐり…浅野川の天神橋から中島大橋の間には、浅野川大橋・中の橋・梅の橋など7つの橋がある。春と秋のお彼岸の夜に、同じ橋を2度渡らないですべてを巡ると、無病息災に過ごせる

という風習がある。知り合いにあつても口をきかない無言の行で、巡り終えた後、下着を洗い、タンスの奥にしまっておく。今でも多くの女性が実践している。

いうまでもなく、「お彼岸の夜」のことから行の条件の詳細までが、「橋づくし」で描写されている行と酷似している。また、金沢市尾張町で店を経営していた女性は金沢市に一般的に伝わっている風習に関して、以下の通り述べている。

「浅野川に架かる七つの橋を回ると願い事が叶う」とはいうても、ちょっとした決まりがあるんや。

・必ず一筆書きのようにして回ること、同じ橋は通らない
・人と出会つても口をきいてはいけない、話しをしたら願い事は叶わなくなるって、伝えられている訳。

(中略)一番困るのは、誰か知っている人に会つて、挨拶されることや。口をきいてはいけないことになっているから、そんな時は身振り手振りで願掛けをしていることを現し、口に指を立てて話せないことを知ってもらうだけ。けど、この辺の人は皆んな「七つの橋めぐり」のことを知っているから、多少身振り手振りが下手でも、ああ成る程と納得して、笑顔でうなずいて別れてくれるからほっとする。

日本中に多く散在する橋に関する行事や伝統において、作品内容と合致するのは恐らく「橋めぐり」のみである。それゆえ、これを、三島の着想を刺激したものと考えることも可能だろう。

いうまでもなく、「橋づくし」の舞台は北陸地方ではなく、築地であり、三人の登場人物は銀座に住んでいる。三島は築地を作品の舞台として選んだ理由に関して、『決定版・三島由紀夫全集』において、以下の通り述べている。

作者は、「七つの橋」の話を赤坂の料亭で聞き、小説のヒントを得たが、赤坂近辺には橋が少なく、背景を築地に移した。¹¹⁾

この発言が正しければ、三島は赤坂で北陸地方の「橋めぐり」について伝聞し、興味を持つに至って作品を書いたと推定できる。

三 「橋づくし」における橋のメタファー

古来、橋は直感的なイメージが豊富であるため、橋は芸術作品に数多く登場している。三島が橋を意識的に利用していたことは、以下の発言から明らかである。

しかし詩趣は橋そのものにあるので、古へからわれらの橋は、現世の橋ではなくて、彼岸へ渡す橋であつた。その限りにおいては、いかに無細工なコンクリートの橋であつても、今日なほ寸分も変らぬ詩句を近松は書いてゐる。「短き物はわれわれが此の世の住居秋の日よ」¹²⁾

三島は橋の隠喩性を把握していたに違いない。加えて、彼が川や橋のメタファーを利用する場合、そこには深い意味が込められている

ことが多い。特に抽象的な、異種の概念を表現する際、彼は上記の引用の場合と同様に、此岸と彼岸のメタファーを利用してゐる。例えば、『禁色』において、登場人物が美に関して以下の通り発言する。

美とは到達できない彼岸なのだ。さうではないか？ 宗教はいつも彼岸を、来世を距離の彼方に置く。…美はこれに反して、いつも彼岸にある。(全集5:566)

また、文学における理性と反理性の問題に関して、三島は以下の通り主張している。

そして文学に於いては、静かな知的確信が何ものをも生まず、もつとも反理性的な陶醉ともつとも知的なものとを繋ぐ橋だけが、何ものかを生むのだと私は考へた。(全集27:324)

つまり、三島は対立関係にある二つの思想を抽象的に結ぶために橋のメタファーを利用した。

メタファー論¹³を活用して、筆者は橋が登場する文学作品の研究を行つてきた。様々な文学作品を分析した結果、橋の隠喩性を厳密に分類することに成功した。橋の隠喩性に関する筆者の分類を利用して、日本文学に登場する作品を考慮しながら、以下に「橋づくし」における橋のメタファーを検討していきたい。

三島が橋の象徴性を意識していたとしても、他の日本文学に見られる橋のパターンを模倣した訳ではない。恋人同士の愛を象徴する

メタファーとしては、『万葉集』や『源氏物語』に登場する橋が代表的なものである。このように日本の古典においては(人間関係の発展は橋を渡ることである)という隠喩性が指摘できる。しかしながら、「橋づくし」においては、そのような例がほとんど見られない。橋を渡れば渡るほど、四人の人間関係が発展するどころか、逆に悪化していく。(人間関係の発展は橋を渡ることである)という隠喩性は作中で機能しているメタファーではない。

古来、(死につつある人は橋を渡る人である)という隠喩性が多くの作品に見られる。「橋づくし」に死のイメージの横溢を見いだす学者が多数いるが、橋を渡ることによって人間の死を予測する場面はない。彼岸に向かうという方向性は作品に含まれているが、彼岸の隠喩は先の『禁色』の引用を考慮すれば、一次元的なメタファーではない。彼岸が何を指しているのかを検討することは必要だが、死を指していると短絡的に結論づけてしまうと、本当の意味を見落とす恐れがある。

また、「犠牲が払われる場合は橋である」という隠喩性は橋姫伝説に見いだせる。高橋氏は橋姫伝が「橋づくし」に影響を及ぼしている¹⁴と述べている。確かにみなの不気味な神秘性には読者が共感できるが、橋姫伝と「橋づくし」との間の具体的な類似性は少ない。例えば、橋姫伝説において、橋姫自身は複数の橋を渡ることがなく、彼女は橋を渡る旅人と関わりを持った女神である。橋姫伝の影響を受けているにしても、ニュアンス程度の色彩しか持っていないレベルである。

上記の隠喩性が「橋づくし」に芸術性の点でほとんど貢献しなくとも、三島の古典に関する知識は豊富であったため、日本文学に見

いだせる橋の隠喩性が彼の作品中に散在する可能性がある。野口氏は橋が「人間の願望の工学的造型」であると指摘しているが、最も基本的な隠喩性である（人生の困難を乗り越えるのは橋を渡ることである）というあり方は、「橋づくし」に大いに貢献しているに違いない。願望が叶って欲しいと考える登場人物は、人生の困難を乗り越えるために複数の橋を渡る。この象徴性はプロットの基盤をなすものであって、作品の題材である行の出発点でもあると考えられる。

次に、〈運命の逆転に遭遇するのは橋を渡ることである〉という隠喩性は、特に川端康成の短編小説「反橋」がその好例として挙げられる。三島が「反橋」連作を「深く中世的なもの」として賞賛し、川端の「ベスト・スリー」に入っていると主張したことは注目すべきだろう。「反橋」において、主人公は、住吉大社の大きく反っている太鼓橋を、母であると信じ込んでいる女性と子供時分に一緒に渡った際に、「実の母ではない」という話を耳にする。語り手の解説によると、その時、反橋の上で彼の人生は幸運に満ちたものから不運なものへと暗転している。三島は「反橋」の影響を受けた上で、「橋づくし」の場合は、特に〈運命の逆転に遭遇するのは橋を渡ることである〉という隠喩性を取り入れたと考えられる。その証拠として、満佐子が行から脱落した場所である、作品最後の備前橋が「軽い勾配の太鼓橋になつてゐる」と描写されている事実を指摘することができる。満佐子とみなとの運命が備前橋を接点として逆転する場面において、備前橋の向こう側にあるのは築地本願寺である。「本願」であるがゆえに渡る、運命を決定する橋が太鼓橋であることは、「反橋」のパターンと酷似しているため、単なる偶然とは言

いがたい。

さらに、〈分離している二つの状態の接点は橋である〉というメタファーは「橋づくし」においても緻密に機能している。しかし、作中における橋は単なる接点ではなく、道の分岐点と同様に選択を行う場所でもある。此岸と彼岸とが完全に分裂しているため、人は渡るか否かの選択をせざるを得ない。三島はこの不可避的な選択によつて此岸と彼岸の明暗の対照性を鮮明にすることを通して、兩岸の違いは何であるのかという疑問を投げかける。

四 「橋づくし」における競争の描写

竹田氏は「みな¹⁸の存在が中途半端に投げ出されている」と述べている。確かに、みな¹⁸の日常の言動や願望の内容は、ほとんど描かれておらず、明らかではない。しかし、他の三人の場合に、作者がその日常の言動や願望の内容を具体的に描写しているのは、三人各様の挫折の違いをより鮮明に描くためであると思われる。結局、「透明な願望¹⁹」の三人は最初から脱落することが、以下の引用において示唆されている。

三人の願ひは簡明で、正直に顔に出てゐて、實に人間らしい願望だから、月下の道を歩く三人を見れば、月はいやでもそれを見ぬいて、叶へてやらうといふ氣になるに違ひない。（全集10・

315）

作品の結末を読めば、この箇所には皮肉が込められていることが分

る。四人ともに願望が叶わないわけではないが、「何か見当のつかない願望を抱いた岩乘(いわのり)な女」である、みなの明らかなではない願望は「侮辱のやうに感じ」られる。作者がみなの願望の内容を明示しなかった理由は、彼女を神秘的な存在にするためである。三人の軽蔑の対象であつたみなの願望の本質が分らないため、満佐子は次第に、みなを驚異的な競争相手と考えるようになる。その上、橋を渡る度に三人の不安と恐怖とが拡大して行く傾向が、橋の神秘的な役割によって生み出されているといえる。

みな以外の三人は、行が人生における運命を左右すると考えるに至り、必死で各々の橋を渡つてゆく。ゲームで負けるはずがない相手から三人が次第に逆転される場面においては、(運命の逆転に遭遇するのは橋を渡ることである)という橋の隠喩性が大いに機能していることが分る。

作品は「各人物の内面を探る」(全集30・130)ことを目指しているため、作者がみなの発言よりも彼女の行動に描写の中心を置くのは当然である。「行動はことばで表現できないからこそ行動なのであり、論じても論じても、論じ盡くせないからこそ行動なのである」と主張する三島にとつては、「橋づくし」の行において、登場人物がほとんど発言を行わない設定を用いたのは偶然ではないだろう。とはいえ、その空白であるはずの言説的空間は、作者が同時に行う解説によつて埋められている。濱崎氏は「話者による判断が濃厚に反映された部分を数多く見いだす」と述べ、この戦略に気づいている。

三島は、このような解説的な叙述を利用して、いかなるテーマを強調しようとしていたのだろうか。以下の引用には、作者の意向が

暗示されている。

小説「橋づくし」は私のほとんど唯一の花柳界小説であるが、もともと私共の年代は永井荷風の年代とはちがつてをり、何らのアイロニーなしに花柳界を扱ふことはむづかしい。(全集30・130)

同様に、作者は「橋づくし」に関して「芸者の世界の、スノビズムと人情と一面の冷酷」を描いたものであると説明している。明らかに、三島は花柳界の代表である三人を、凡人の行動の描写を通して揶揄している。しかし、スノビズムの描写は、特に満佐子とみなの対照的なあり方に焦点をあてている。三島は「箱入り娘」と「用心棒」、令嬢と女中、都会人と地方出身者、流行と古風、高学歴の人間と無教養な人物、尊敬と軽蔑、内と外、饒舌と無口、「鋭い爪先」と弾力的な「丸い肩」など、様々なコントラストを設けている。それぞれの対照性を考慮すれば、三島はみなを悪意をもって描写していると捉えがちになるが、それは表面的な解釈にしからずない。満佐子たちの視点から見ると、みなは無口なソクラテスのような人物である。みなは口を利かなくとも、行動によつて、三人の弱点を露呈させている。そのため、「橋づくし」は上流階級を批判する「イデオロギー小説」であると丸谷氏は述べている。「橋づくし」は社会階級を踏まえて執筆されているが、そのように単純化してすむものではない。

主人公であるはずの満佐子は早大生であり、東京のファッションや流行の映画に憧れる、近代を象徴する女性である。このような描